

アフリカの高出生と日本（東アジア）の超低出生：どちらが幸せか 一夫多妻と未婚の比較から

High fertility in Africa and low fertility in Japan (East Asia): which is happier?

Comparing polygyny and celibacy

林玲子（国立社会保障・人口問題研究所）

Reiko Hayashi (National Institute of Population and Social Security Research)

hayashi-reiko@ipss.go.jp

アフリカの高出生と日本（東アジア）の超低出生はどちらが幸せか、というテーマに関し、本報告ではアフリカにおける一夫多妻と日本（東アジア）における未婚を軸に比較分析をする。

一夫多妻はサブサハラアフリカにおいては宗教に関わらず広くみられる結婚形式であるが、高いところでは15 - 49歳の有配偶女性の54%が一夫多妻婚であるブルキナファソやギニアから、低いところでは4%であるマダガスカルまで国により差がある。いずれの国も女性が高齢になるほど一夫多妻の割合は大きくなる傾向があり、農村部で高く都市部で低く、また教育程度が高いと一夫多妻婚の割合は低くなる（Westoff 2003）。一夫多妻婚では出生率が低くなる、というのが古典的な一夫多妻-出生率仮説であるが（Lorimer 1958）、逆の結果、つまり一夫多妻を一夫一妻にすると出生率が40%下がり、貯蓄を70%増やし経済水準を170%増やすという分析もある（Tertilt 2005）。またアフリカの一夫多妻の多さは他地域を凌駕しており、アフリカの中でも一夫多妻が多い国の出生率は高いことから、一夫多妻と高出生は関連があるとみるのが妥当であると考えられる。

一方東アジアにおける超低出生について、未婚率が高いことが一つの要因であることに異論はないだろう。そうであれば、アフリカの高出生と日本（東アジア）の超低出生はどちらが幸せか、という問いは、一夫多妻と未婚との比較に置換することができる。そして、一夫多妻、未婚のいずれも、一夫一妻というキリスト教、欧米、近代の規範的な結婚形式の枠外にあるものであり、そのような規範の中では幸福で、望ましいとされるものではない。本報告では、アフリカと東アジアの一夫多妻と未婚に関するデータを、一夫一妻との比較という観点から分析する。

参考文献

Lorimer, Frank (1958) *Culture and Human Fertility*, Greenwood Press Publishers (reprint)

Tertilt, Michèle (2005) "Polygyny, Fertility, and Savings" *Journal of Political Economy*, Vol. 113, No. 6, pp. 1341-1371.

Westoff, C. (2003) *Trends in Marriage and Early Childbearing in Developing Countries*, Vol. 5. Demographic and Health Survey (DHS) Comparative Reports (ORC Macro).